

透析小児の社会復帰の現況

高田恒郎

新潟県立吉田病院小児科

〈序 言〉

透析療法の進歩に伴い長期生存者が増加し、透析療法を受けながら社会復帰をしている患児も増加傾向にあると思われるが、その実態についての報告は殆んどみあたらない。今回、われわれは透析小児の学習状況の現実、そして小児期に透析導入され、成人に達した現在でも透析を受けている15名の社会復帰の現状について自験例に基づいて報告する。

〈対象ならびに方法〉

対象は小児期に透析導入され、当科にて慢性血液透析を施行した28例である。透析導入前の学習状況を問診した。さらに15例は昭和60年12月現在で成人に達しており、全例他施設で血液透析を受けており、手紙でのアンケート調査、電話回答により社会復帰の状況を調査した。

〈成 績〉

はじめに透析患児の学習状況をみるために透析導入前の状況をみてみると大多数の例に学業の遅れがみられた。症例を紹介すると、先天性腎低形成の男児で昭和45年4月に発見され、昭和53年7月10日に透析導入した。この児の発見から透析導入までの学習状況をみると、昭和45年4月から昭和46年5月まで某病院入院、精査や食事療法などを受け、13ヶ月間は全くの不登校、さらに昭和46年6月から同年9月まで某大学病院へ入院し、3ヶ月間は全くの不登校、そして昭和46年10月から昭和53年1月までは部分登校をくり返し、体

慢性腎不全患児の透析導入前の学習状況（発病から当科入院まで）表1

全く学校へ行かなかった期間	7.8±5.0ヶ月 (最高 19ヶ月)
午前中のみの登校など 部分登校の期間	10.3±6.2ヶ月 (最高 1年9ヶ月)
体育を休んだ期間	33.8±15.7ヶ月 (最高 6年4ヶ月)
1年留年	3名/28名
2年留年	1名/28名

透析導入後より学習開始までの期間 表2

養護学校のある当科	他院で導入し当科転院
25.1±10日 (N=13)	260±50日 (N=6)

育は全て見学であった。末期腎不全に陥り、昭和53年4月から6月まで某大学病院に再入院し、この患児は99ヶ月間の保存的療法中実際に19ヶ月間全くの不登校があり、結果として義務教育で留年の既往をつくってしまっている。この例に代表されるように透析小児の大多数は透析導入前より学業が遅れており、28例の導入前の学習状況をまとめてみると、全くの不登校の期間は平均で7.8ヶ月間、部分登校でも10ヶ月間、体育は全く見学というのは実に3年にも及んでいる。1年留年が3名、2年留年が1名にみられた（表1）。このような患児は透析に導入されれば学習の機会はますます遠のいてしまうことが予想されるため、当科では併設の養護学校に入れて、透析

小児期に透析導入され現在成人に達した15例の社会復帰の現状 表3

症例	性別	年齢	透析歴	透析回数	現在の仕事内容
H.H.	女	24	11年 7月	夜間 3回/W	主婦
K.H.	男	21	10年 3月	夜間 2回/W 昼間 1回/W 夜勤が週2~3回	染色工場で働いている
H.K.	男	22	9年 4月	夜間 3回/W	うどん、ラーメンのセールス
G.K.	女	21	9年 4月	夜間 3回/W	効率工場で働いている
S.H.	女	22	9年 0月	夜間 3回/W	事務、販売など
S.H.	男	23	8年 5月	夜間 3回/W	地元の農地登記簿で土地登記事務
M.K.	女	25	7年 6月	夜間 2回/W	自宅と教室でピアノの教習
M.H.	男	22	9年 6月	夜間 2回/W	靴類製品の組み立て
				昼間 1回/W	夜勤が週1~2回
H.K.	男	23	6年 3月	夜間 3回/W	飲食店の手伝い
H.K.	女	20	5年10月	夜間 3回/W	不動産の事務整理
T.Y.	女	24	5年 4月	夜間 3回/W	事務、販売など
M.A.	男	20	5年 2月	夜間 3回/W	専門学校
M.K.	男	22	4年 6月	夜間 3回/W	印刷工場で働いている
T.A.	女	21	4年 2月	昼間 3回/W	家庭手伝い主
M.K.	男	20	4年 0月	夜間 1回/W 昼間 2回/W	靴類製品の加工、検査 夜勤週3回

現在の職場はどのようにして就職したか？ 表4

1. 医療関係者の紹介	0名
2. 学校の先生	1名
3. 職業安定所を通して	1名
4. 知人の紹介	3名
5. 親戚、身内の紹介	5名
6. 自分で捜す	1名
7. その他	4名
(主婦、専門学校、家事手伝い)	

成人に達した15例の現在の生活状況 表5

a) 住居について

家族（父、母など）と一緒に	13名
独りで（アパート、社宅）	1名
友人、知人宅	1名

b) 生計について

自分の給料だけ	3名
家族の全面援助	2名
自分の給料と家族の援助	9名
その他	1名

社会復帰前の希望と現在の職業、生活のGap 表6

- | | |
|-----------|---------|
| 1. 大学進学 | 専門学校 |
| 2. 大学進学 | 印刷工場 |
| 3. 専門学校 | 親の店の手伝い |
| 4. デザイン学校 | 染色工場 |
| 5. 専門学校 | 事務 |
| 6. 料理学校 | 電機工場 |
| 7. 接待業 | 事務 |
| 8. 理容業 | 事務 |
| 9. セルフマン | 土地登記事務 |
| 10. 学校の教師 | ピアノの先生 |
| 11. なし | セルフマン |
| 12. なし | 電機工場 |
| 13. なし | 耕種工場 |
| 14. なし | 家事手伝い |

時間も利用したベッドサイド学習もとり入れて、学習の遅れをとりもどそうとしている。当科で透析導入した例と他院で透析導入した例で、透析導入から学習開始までの期間をみてみると、当科では25日、もう一方は260日と10倍もの差があることがみられた（表2）。

次に、小児期に透析導入され、成人に達した現在でも透析をつづけている15例は20歳から24歳で男性8名、女性7名である。透析歴は4年から最高11年7ヶ月にわたっている。週3回の夜間透析例が大多数である。腎不全以外に知能低下、難治性てんかんを伴っている1例のみが社会復帰をしていないが、その他は主婦が1名、専門学校へ通っているものが2名、その他の11名がそれぞれの職場で働いている（表3）。現在の職場をどのようにしてさがしたかについては、職業安定所を通して就職した例は1名にすぎず、大多数が知人、親戚、親などの身内の紹介で職に就いている（表4）。現在の生活状況についてみると、住居については殆んどが家族と一緒にであり、自立しているものはわずかで、生計についても同様で、大多数が親、家族の援助を受けていた（表5）。社会復帰をはたして

いる14名の社会復帰前の希望と現在の境遇についてみてみると、大学進学を透析のため断念せざるをえなかつた例が2名あり、その他でも希望と現在の職業に大きなGapがみられた。また、社会へ巣立っていく希望が全くない児が4例に認められた（表6）。

＜考 案＞

透析小児の学習状況をみてみると、学業の遅れはむしろ透析前に原因している例が圧倒的に多く、義務教育で留年している例が28例中4例（14%）にも達していた。末期腎不全患児とはいえ体育授業の見学が平均3年間に及んでいたのは今後問題になると思われる。また、透析に導入されれば学習の機会はますます遠のいてしまうことが予想され、養護学校が併設されている当科では透析後平均25日で学習が再開されているが、他の成人の透析センターにて導入された例は平均260日を経て学習が再開されており、透析施設と学校の密接な連携も重要と考えられる。また、幼児期より透析を受けている学童は集団不適合や応用力、論理的な面が劣ることが多く、このような例の教育に問題が残されており、積極的な移植の導入も考慮されるべきである。以上より、透析小児については透析導入前からの学習援助が非常に大切であることを強調したい。

小児期より成人まで透析を受けている15例の社会復帰の現状を検討したところ、知能低下、難治性てんかんを合併している1例のみが社会復帰をしていなかつたが、その他は元気でそれぞれの職場、学校で活動していた。

3例は昼間透析、夜間透析を交互に施行し、透析のない日に夜勤業務についており、昼間透析日を休業にあて、うまく透析時間を利用している例もみられた。現在の職場をどのようにさがしたかについては11名中8名が知人、親戚、親などの紹介に依っており、われわれ医療関係者は全く無力であった。また、現在

の生活状態も殆んどが親、家族の援助を受けており、成人に達しても親に頼り切っているのが現実であった。社会復帰前の希望と現在の境遇については殆んどにGapがみられ、希望の学校、職業に就いた例はみられなかった。また、社会に巣立っていく希望が全くない者が4例もあり、透析小児が長い療養生活の中で無気力になっていくのも事実であり、社会復帰を考える上で考えさせられる点である。

＜結 論＞

小児期に透析導入され、現在成人に達している15例の社会復帰の現状について報告した。現在の彼らは与えられた体力、時間内でよくやっていると思われるが、彼らをとりまく環境はきびしく、希望の進学、就職へ就けないのが現実であった。その中で、われわれ医療人は無力と言わざるを得ない。医療技術の進歩に伴い長期延命例が増加し、小児期から透析療法をつづける成人が増加していくものと思われる。長期の透析療法のため無気力になったり、明日への希望も希薄な患児もいることから、透析小児の社会復帰を考える場合、腎移植の全国的な啓蒙のみならず、彼らを援助する暖かい社会環境が必要であると思われる。

検索用テキスト OCR(光学的文書認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

<結論

小児期に透析導入され、現在成人に達している 15 例の社会復帰の現状について報告した。現在の彼らは与えられた体力、時間内でよくやっていると思われるが、彼らをとりまく環境はきびしく、希望の進学、就職へ就けないのが現実であった。その中で、われわれ医療人は無力と言わざるを得ない。医療技術の進歩に伴い長期延命例が増加し、小児期から透析療法をつづける成人が増加してくるものと思われる。長期の透析療法のため無気力になったり、明日への希望も希薄な患児もいることから、透析小児の社会復帰を考える場合、腎移植の全国的な啓蒙のみならず、彼らを援助する暖かい社会環境が必要であると思われる。